

## 番組小学校の遺物

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



石盤と石筆 下の石盤の長さ 12.0cm

**番組小学校** 日本では明治4年(1871)に文部省ができ、5年から学校教育が始まりますが、京都ではそれより早い明治2年、各町内に小学校が設置されます。これは同年に京都府が、南北4町・東西3町の範囲で、町の数26～27をもって一組とする町組改正を実施し、<sup>まちぐみ</sup>上大組は<sup>かみおおぐみ</sup>33番組、<sup>しもおおぐみ</sup>下大組は32番組(後に33番組)に再編された各町内に番組小学校が置かれたからです。

<sup>じょうそん</sup>城巽学区は明治2年の上大組24番組にはじまり、幾度の変遷を経た後、昭和4年(1929)に今の城巽学

区となります。小学校は明治2年に東隣の下古城町で開校し、5年に現在の地に移されました。昭和22年には城巽中学校となり近年に至りましたが、平成22年からは京都市立京都堀川音楽高等学校となり現在に至ります。

**元城巽中学校の調査** 当地は平安京左京三条二坊十町に当り、平安時代後期の里内裏、堀河院の南半分<sup>に</sup>当ります。平成19年の発掘調査では堀河院の池を2基検出しています。

番組小学校に関する遺構は明確

ではありませんでした。<sup>せきばん</sup>石盤や<sup>せきひつ</sup>石筆など、番組小学校に関する遺物は様々な遺構から出土しており、<sup>ひけしつぼ</sup>墨書のある火消壺は、溝からまとまって出土しました。

**石盤** 明治時代の学校で使用された、今日のノートに相当するものです。粘板岩製の薄板を方形に加工して作られています。完全な形状を保つ出土品はなく、隅部が残るものの、紐を通す孔をあけたものもみられます。直線でマス目を刻むものは文字を正確に書くための割り付け線で、マス内に「上京才」、「又」あ

るいは「文」、「条」などの文字が残されています。

**石筆** 石の鉛筆に当たるものが石筆です。石盤に当てて文字を書きました。10点あり、長さ4～7cmで、ほとんどの先端は尖らせています。角形に加工したものが2点、穴を開けて笛のようにし、先に別の石を埋め込んだものが1点あります。石材は滑石が1点、他はすべて蠟石とみられます。

石盤と石筆は明治時代から昭和初期に小学校で使用されました。破損しやすいため木枠で固定されていたようで、京都市学校歴史博物館には大（横28cm、縦18cm）と小（横21cm、縦14cm）の2種類が保管されています。

**火消壺** 体部は寸胴で大きな口をもち、上に蓋が乗る器形です。胴体は縦方向の溝で区切られており、身も蓋も型で作られています。

外面に「被服室」「タイプ室」と墨書するものがあり、これらには「46 信 211」「48 信 211」の刻印が押されていました。この刻印は戦時中、金属製品の代用品として信樂で作られた「統制陶器」を示すもので、昭和時代に属する遺物といえます。「被服室」ですが、ここには火の熨斗（アイロン）があったと思われることから、この壺は炭を入れるために使われたのでしょう。

**陶製オロシ金** オロシ金を陶器で製作したものです。番組小学校との関係は不明ですが、新しい時代の到来を告げる遺物として紹介しておきます。

表面左右の縁は粘土を盛り上げ、卸したものが横にこぼれ落ちない



火消壺 右端の壺の高さ15.5cm



陶製オロシ金 左：表、右：裏 上下の長さ14.0cm

ように作られています。ナゲで調整した後、鋭利な工具を刺し込んでオロシ目を作り出します。このオロシ目は2列一組で10組（上から3組目が乱れていますが）あり、これに上端・下端の1列を加えた合計22列が施されています。

裏面には「癸酉 明治六年六月廿一日 うゑ田留吉 持用」の文字が4行にわたり線刻されています。

明治6年(1873)という年ですが、明治3年9月の「平民苗字許可令」で平民に苗字(名字・姓)が許され

ると、4年10月の「<sup>せいしふしょうれい</sup>姓戸不称令」で本姓は「<sup>ほんせい</sup>姓」、<sup>せい</sup>氏・<sup>うじ</sup>名字は「苗字」、<sup>かばね</sup>かばねは「戸」に整理されます。5年5月「通称実名を一つに定める事」で本名は一つと決められ、8年2月の「<sup>へいみんみょうじひつしょうぎむれい</sup>平民苗字必称義務令」で国民は名字をもつことが義務付けられたのです。このような時代背景を考えると、「うえ田」姓を得た「留吉」氏は焼物の記念品を作らせたのではないのでしょうか。しかし、なぜオロシ金…。料理人だったのでしょうか。(丸川義広)